

親父が認知症に!?

平藤清刀さんの介護体験記 #9

■徘徊の末に

父が搬送された病院が分かって、私はすぐに駆け付けることはしませんでした。理由は、おなかが空いていたからです。ですから、まずは軽く食事をしました。

怒られそうですが、これは先のことを見越して敢えてそのようにしました。救急搬送ですし、もし父が自ら意思表示できない状態ならば、病院側は家族から情報を取るしかありません。その日の朝からの様子、既往症、持病やアレルギーの有無など、さまざまなことを尋ねられるでしょう。そして入院手続きもありま

す。それらのことに落ちていて対応するためには、空腹では何かと具合が良くないわけです。しかも病院に運ばれているということは、適切な処置を受けているはずですから、かえって安心だと判断しました。

腹ごしらえを済ませて病院へ行ってみると、母がいました。どういう状況で運ばれたのかを尋ねましたが、気が動転しているせいかまったく要領を得ません。その日起こったことを順序立てて話すことができず、朝から起こったことを全てひとつの話の筋に織り込んでしまうため、矛盾だら

けの支離滅裂な話になっていました。

せめて救急搬送された前後の経緯を知りたいので、看護師から話を聞くことにしました。対応した看護師から、救急隊からの申し送りを訊くことができました。要約すると、おおむね次のような経緯でした。

朝食を摂ったあと父が「家に帰る」と出て行ってから3時間以上経った午後3時半ごろ、見知らぬ町工場へフアリと現れて、服を脱ぎ始めたそうです。そのとき、すでにどこかで転倒していたのでしょうか。顔面から出血していたので、工場の人びびくりして救急車を呼んでくれたとのこと。 (次回に続く)